

第3章

東部における選挙

佐藤 創

本章では、東部主要5州(アッサム、西ベンガル、ジャールカンド、オディシャ、チャットティースガル)と北東諸州(アルナーチャル・プラデーシュ、ナガランド、メガラヤ、マニプル、ミゾラム、トリプラ、シッキム)の選挙の概要と結果を簡単にまとめる。本章の対象とする州の連邦下院議席数は、西ベンガルの42議席がひとときわ多く、次いでオディシャが21議席であり、アッサムとジャールカンドがそれぞれ14議席、チャットティースガルが11議席、北東諸州の合計が11議席となっており、合計で113議席である。

このうち今回の選挙では、インド人民党(BJP)が前回2009年の23議席から10議席増やして33議席、国民会議派(会議派)は2009年の27議席から14議席減らして13議席という結果となった。また、BJPと会議派いずれとも選挙協力をしなかった地域政党が躍進した州もあり、オディシャではビジュ・ジャナター・ダルが20議席(前回2009年選挙より6議席増加)、西ベンガルでは全インド草の根会議派(AITC)が34議席(15議席増加)を得ている。

表3.1 東部主要5州の基礎情報

	人口(人)	一人当たりSDP(2013年度) (ルピー)	一人当たりSDP年平均成長率(2004年度から2013年度)(%)	都市人口比率(%)	指定カースト(SCs)比率(%)	指定部族(STs)比率(%)	識字率(%)		
							男性(%)	女性(%)	
アッサム	31,205,576	24,533	4.3	14.1	7.2	12.4	72.2	77.8	66.3
西ベンガル	91,276,115	37,511	5.8	31.9	23.5	5.8	76.3	81.7	70.5
ジャールカンド	32,988,134	30,091	5.5	24.0	12.1	26.2	66.4	76.8	55.4
オディシャ	41,974,218	25,891	4.3	16.7	17.1	22.8	72.9	81.6	64.0
チャットティースガル	25,545,198	28,708	5.0	23.2	12.8	30.6	70.3	80.3	60.2
全インド・全インド平均	1,210,569,573	39,961	5.8	31.2	16.6	8.6	73.0	80.9	64.6

(出所) GOI(Government of India) (2013) Census of India 2011, Primary Census Abstract Data Highlights, India Series 1 : GOI, およびGOI,

MOSPI(Ministry of Statistics and Programme Implementation), CSO(Central Statistics Office)のSDPに関するデータ

(http://mospi.nic.in/Mospi_New/site/inner.aspx?status=3&menu_id=82)より作成。

(注) 一人当たりSDPは2004/05固定価格。

1. オディシヤ州：ビジュー・ジャナター・ダルの大勝

オディシヤ州はベンガル湾に臨む東部の沿岸地域と、天然資源に恵まれた西部の丘陵地帯からなる。2011年のセンサスによると人口は4197万人であり、識字率は72.9%、都市人口比率は16.7%、指定部族(STs)の人口比は22.8%、指定カースト(SCs)は17.1%である(表3.1)⁽¹⁾。全インド平均に対して、都市人口比率が低いこと、STsの人口比が高いことが特徴であり、少数民族はおもに西部の丘陵地域に居住している。なお、2001年のセンサスでは、宗教別の人口構成は、ヒンドゥー教徒が94.4%と大多数を占め、そのほかキリスト教徒、イスラーム教徒がそれぞれ2.4%、2.1%であり、オリヤー語を話す人口が8割を超えていた。経済的な側面に注目すると、オディシヤはいまだ貧しい州である。2013年度の一人当たり純州内生産(Net State Domestic Products: Net SDP)は2万5891ルピーであり、全国平均の3万9961ルピーの6割強しかない。また2004年度から2013年度までの一人当たりSDPの年平均成長率は4.3%であり、この値も全インド平均の5.8%を相当程度下回っている。

オディシヤ州の連邦下院議員定数は21であり、そのうちSTs、SCsの留保議席はそれぞれ5議席、3議席である。1980年から1990年まで、1995年から1999年まで州政権を担当した会議派J.B.パトナイクは国民会議派中央政府との強い関係を基礎に開発を進める手法をとり、1990年から1995年まで州政権の座にあったジャナター・ダルのビジュー・パトナイクは州の自立を訴え支持を得た。また、BJPは1990年代に入って西部のSTsに徐々に支持を広げていた。オディシヤ州ではこの3党が主たる政党である。1997年にビジューが死去し危機に陥ったジャナター・ダルは、BJPと協力し会議派と対決する方針を採用し、これに反対する中央のジャナター・ダルと手を切って地域政党ビジュー・ジャナター・ダルを結成した。2000年の州選挙にビジュー・ジャナター・ダルは勝利し、それ以来、党首ナヴィーン・パトナイクが州首相を3期務めている状況にあった。

ビジュー・ジャナター・ダルとBJPの選挙協力は1998年から2009年まで続いていたが、BJP系のヒンドゥー主義の団体が深刻な宗派暴動を引き起こしたことを主たる要因として2009年の選挙前に訣別しており、2009年の総選挙時と同様に今回も主要3党は三つ巴の選挙戦となった。なおオディシヤでは連邦下院と州議会は同時に選挙が行われた。ビジュー・ジャナター・ダルは、2009年以降は中央の会議派率いる統一進歩連合(UPA)政権に対する批判を強めており、また会議派をはじめとする他党の連邦下院議員および州議会議員を何人か迎え入れ、勝利は手堅いものと考えていた。それに対して、会議派は州の党

組織弱体化の立て直しに失敗しており積極的な選挙を展開できず、BJP はモディ人気に依存した選挙戦であり、とくに投票日直前にはモディ・ウェーヴの広まりにビजू・ジャナター・ダルも警戒を強めていた。

表3.2 オディシヤ州の連邦下院および州議会選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数21)

	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	24,187,490		25,651,989		27,194,864		29,196,041	
投票率 (%)	55.6		66.1		65.3		73.8	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
ビजू・ジャナター・ダル	10	33.0	11	30.0	14	37.2	20	44.1
BJP	9	24.6	7	19.3	0	16.9	1	21.5
会議派	2	36.9	2	40.4	6	32.8	0	26.0
その他	0		1		1		0	

州議会選挙結果 (定数147)

	2000		2004		2009		2014	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
ビजू・ジャナター・ダル	68	29.4	61	27.4	103	38.9	117	43.4
BJP	38	18.2	32	17.1	6	15.1	10	18.0
会議派	26	33.8	38	34.8	27	29.1	16	25.7
その他	5		8		5		4	

(出所) Election Commission of India ウェブサイトのデータ、吉田 (2001 ; 2006a) および上田ほか (2011) を参照して作成。

連邦下院選挙では定数 21 のうち、ビजू・ジャナター・ダルが 20 議席、得票率で 44.1% と圧勝をおさめた(表 3.2)。BJP は得票率を 5% ポイントほど伸ばし 21.5%、大臣経験をもつなど経験豊富な候補者が 1 議席を得た。会議派は得票率こそ BJP を上回ったものの(26.0%)、1 議席も得られず惨敗した。同時に行われた州議会選挙でも、定数 147 のうち、ビजू・ジャナター・ダルが 117 議席、会議派が 16 議席、BJP が 10 議席をそれぞれ獲得する結果となり、こちらでもビजू・ジャナター・ダルが圧勝し、BJP が議席を 4 つ積み増し、会議派が 11 議席減らした。

このようにオディシヤでは BJP は若干伸長したものの、ビजू・ジャナター・ダルが一党支配を強める結果となり、ナヴィーンは州首相 4 期目を務めることとなった。州政権を担い始めた 2000 年から今回の選挙に至るまで経済の発展には功績を挙げたとは言い難い状況にあり、鉱工業開発をめぐる対象地域の住民(STs を多く含む)の立ち退き問題が社会問題化しているにもかかわらず、ビजू・ジャナター・ダルが上位カースト層を含む広い社会階層から支持を受けて勝利した理由としては以下のような要因が考えられる。ナヴィーンの清廉なイメージ、経済の後進性に関する不満を中央政府に振り向けてオディシヤの自立を訴えるなど会議派の中央政権との対立姿勢を次第に強めていたこと、女性および STs、貧困層への所得再分配政策に取り組み、また巧みにアピールしてきたことなどである。ただし、大勝したとはいえビजू・ジャナター・ダルの州政権は、中央で

成立した BJP 政権と今後どのような関係を築くのか苦慮する可能性がある。

2. ジャールカンド州：BJP が議席を積み増す

ジャールカンドは 2000 年にビハールから分離して創設された比較的新しい州で、北にビハール、東に西ベンガル、南はオディシヤに接した内陸州である⁽²⁾。鉄鉱石などの天然資源が豊富であり、タタ・スチールの本拠地ジャムシェドプルがある。また部族民が多く暮らす森林地帯ではナクサライトと呼ばれる極左武装集団の活動が活発である。2011 年のセンサスではジャールカンドの人口は 3299 万人であり、そのうち SCs は 12.1%、STs は 26.2%、都市人口比率は 24.0%、識字率は 66.4%であった(表 3.1)。STs の人口比が高いこと、識字率が低いことが顕著である。2001 年のセンサスではムスリムが 13.8%、4.1%がクリスチャンであった。経済面では、2013 年度の一人当たり SDP は 3 万 91 ルピーであり、その 2004 年度からの平均成長率は 5.5%であった。成長率は全インド平均とさほど変わらなかったが、一人当たり SDP は全インド平均よりまだ低い状況にある。

ジャールカンド州の連邦下院議員定数は 14 であり、そのうち SCs の留保議席が 1、STs の留保議席が 5 である。ジャールカンドの創設を最終的に推進し実現することに大きな役割を果たした政党は BJP であった。もともとはビハール、西ベンガル、オディシヤ、マディヤ・プラデーシュに広がる高原地域をジャールカンド州として独自の州とするという要求を少数民族が訴えていたが、ビハール州南部の天然資源があり鉱工業の展開している地域を貧しいビハール北部から切り離す運動が活発となった。これを担ったジャールカンド解放戦線(JMM)が汚職問題で 1990 年代後半に勢力を失い、その間隙を埋めて BJP が州議席を徐々に増やし、さらに BJP 率いる国民民主連合(NDA)政府が中央で政権につくと、2000 年にジャールカンド州がビハール州から分離して成立した。

しかし、州創設後に州政権を担った NDA 内で BJP とジャナター・ダル(統一派)(JD(U))が対立し選挙協力が行われなかったこともあり、BJP は 2004 年連邦下院選挙で UPA に大敗し、以降、2005 年州議会選挙、2009 年州議会選挙といずれの政党も安定多数を獲得できなかった。それゆえ、州首相が頻繁に交替して大統領統治になるなどの事態もあった。実に、州創設から 13 年のあいだに政権交代が 9 回、大統領統治が 3 年あり、州政府の不安定さを反映している。連邦下院選挙については 2009 年時には、BJP は JD(U)と選挙協力を行い 8 議席を獲得、選挙協力に失敗した UPA は、JMM が 2、会議派が 1 議席であった。今回の連邦下院選挙時には JMM 党首シブ・ソレンの息子であるヘマント・ソレンが JMM、会議派、民族ジャナター・ダル(RJD)の連立で州政権を担っていた。

ジャールカンド州でも電力や鉱業部門で外国直接投資招致の試みが積極的に追及されてきたものの、土地収奪と強制移住が政治的問題となり、政府や大企業により企画されている開発プロジェクトへの反対運動が盛んである。また、ナクサライトの活動地域でもある。企業誘致活動の維持促進を視野に入れている BJP と会議派はいずれも土地収奪や強制移住の問題は争点化しないように選挙戦を展開した。BJP はここでは開発は必ずしもポジティブな意味とならないため、グジャラート・モデルという言葉はあまり使わず、モディのカリスマ性に訴える手法を採用した。会議派は JMM と選挙協力し、STs 出身で元州首相のバブラル・マランディが BJP から分かれて創設したジャールカンド開発戦線(民主主義)は部族アイデンティティに訴えていた。結果はモディを前面に出した BJP が 14 議席のうち 12 議席を獲得し、投票率も 40.1%に伸ばして圧勝した(表 3.3)。対して会議派は得票率こそ微減であり 13.3%であったものの議席は獲得できず、選挙協力した JMM が党首のシブ・ソレンなど 2 議席を獲得した。得票傾向をみると、ジャールカンド州では、中央および州政府を担っていた会議派とその友党への不満、つまり現職批判の傾向が強く、BJP は若年層、都市、上位カースト・ヒンドゥー、その他後進カースト、富裕層などの支持を集め、BJP が大勝した他州と同じ傾向を示している。ただし、ムスリム票の 60%は会議派およびその友党が獲得し、BJP へ向かったのは 9%のみである。BJP が中央レベルで政権を担当することになり、州の創設以来頻繁に交替して安定さを欠く状況が続き、かつ現在は会議派と JMM が支えている州政権にどのような影響があるか、州議会選挙が 2014 年末に予定されている。

表3.3 ジャールカンド州の連邦下院選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数14)

	1999		2004		2009		2014	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
有権者数 (人)	14,894,905		16,812,339		17,934,095		20,326,743	
投票率 (%)	51.8		55.7		50.9		63.9	
BJP	11	45.5	1	33.0	8	27.5	12	40.1
ジャールカンド解放戦線(JMM)	0	9.5	4	16.3	2	11.7	2	9.3
会議派	2	23.8	6	21.4	1	15.0	0	13.3
ジャールカンド開発戦線 (民主主義)	-	-	-	-	1	10.5	0	12.1
その他	1	-	3	-	2	-	0	-

(出所) Election commission of Indiaウェブサイトのデータ、吉田 (2006b) および上田ほか (2011) を参照して作成。

(注) 1999年は州創設前の同地域に関する概算。

3. チャットティースガル州：BJP が再び圧勝

チャットティースガル州は 2000 年にマディヤ・プラデーシュ州から分離して誕生した州で、2011 年には、人口は 2555 万人であり、そのうち SCs は 12.8%、STs は 30.6%、都

市人口比率は 23.2%，識字率は全体で 70.3%であった(表 3.1)⁽³⁾。STs の人口比が高く、とくに女性の識字率が低いという特徴がある。2001 年のセンサスでは、ヒンドゥー教徒が 94.7%とその比率が高く、またヒンディー語を話す人口が 8 割を超えていた。連邦下院議員定数は 11 であり、そのうち SCs の留保議席は 1，STs の留保議席は 4 である。2013 年度の一人当たり SDP は 2 万 8708 ルピーであり、その 2004 年度からの年平均成長率は 5.0%であった。チャッティースガル州もまた全インド平均に比べて 3 割ほど平均所得が低いことがわかる。

チャッティースガルでは BJP と会議派の 2 党が強く、地域政党があまり強くないという特徴がある。独立の州となって初めて行われた 2003 年の州議会選挙では、会議派州政権が腐敗などの理由で敗北し、BJP の政権が誕生した。2004 年の連邦下院選挙でも同様に、BJP が 11 議席のうち 10 議席を獲得した。それ以来、州首相ラーマン・シンへの信頼があり、州議会選挙では BJP と会議派の得票率に大きな差はないものの BJP が議席の過半数を 2013 年の選挙まで獲得し続けており、とくに連邦下院選挙では BJP が圧勝してきた(表 3.4)。なお、同州でもナクサライトの活動は活発で治安問題は深刻である。

表3.4 チャッティースガルの連邦下院および州議会選挙結果

連邦下院選挙結果 (定数11)

	1999		2004		2009		2014	
有権者数 (人)	12,230,305		13,719,442		15,466,821		17,623,049	
投票率 (%)	55.3		52.1		55.3		69.5	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
BJP	8	47.9	10	47.8	10	45.0	10	48.7
会議派	3	43.4	1	40.2	1	37.3	1	38.4

州議会選挙結果 (定数90)

	1998		2003		2008		2013	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
BJP	36	40.1	50	39.3	50	40.3	49	41.0
会議派	48	40.6	37	36.7	38	38.6	39	40.3
その他	-	-	3	-	2	-	2	-

(出所) Election Commission of Indiaウェブサイトのデータ，上田 (2006) および上田ほか (2011) より作成。

(注) 1999年は州創立前の同地域に関する概算。

今回の選挙では、州政権を担っている BJP は、中央政府もまた BJP の政権となれば、さらなる発展を約束すると主張して選挙戦を戦った。チャッティースガル・開発モデルを謳い、「1(モディ)+1(シン)=11」をスローガンに全 11 議席をとりに行くというものである。またナクサライト問題については会議派率いる中央政権が協力的でないとして責任をかわすレトリックを展開した。会議派は 2013 年の州議会選挙では全 90 議席のうち 39 を得て善戦したが、今回の連邦下院選挙では士気が低かった。結果は、投票率は 69.5%と高く、今回も前回と同じく BJP が 10 議席，会議派が 1 議席を獲得した。前回の連邦下院議員選挙と

比べると、BJPは得票率でおよそ3.7%ポイント増やしたのに対し、会議派も1.1%ポイント得票率を増やしている。興味深いことに、BJPが獲得した票の特徴は貧困層・社会的弱者層や農村で比率が高く、他方で、会議派は若年層、都市でBJP以上に得票しており、他州と異なる様相をみせている。会議派率いる中央政府が実施した全国農村雇用保証法などの貧困層向けの諸施策について、現場では州政府が実施するという事情もあり、州政府およびBJPのポイントにすることに成功していたと考えられる。

4. 西ベンガル州:全インド草の根会議派(AITC)のさらなる躍進と止まらない左翼戦線の後退

西ベンガル州はコルカタを擁する東部インドの中心であり、人口は2011年のセンサスでは9128万人であった(表3.1)⁽⁴⁾。都市人口比率も31.9%とほかの東部諸州と比べて高く、SCsの比率は23.5%、STsは5.8%、識字率は76.3%である。2001年のセンサスではヒンドゥー教徒が72.5%、ムスリムが25.2%である。ムスリムとSCsの比率が相対的に高いことが特徴である。2013年度の一人当たりSDPは3万7511ルピーであり、全インド平均には及ばないものの東部諸州のなかではやや高く、その2004年度からの平均年成長率も5.8%で全インド平均と等しい。連邦下院議員定数は42議席であり、そのうちSCsの留保議席は10、STsの留保議席は2である。

よく知られているように、西ベンガル州では、インド共産党(マルクス主義)(CPI(M))が主導する左翼戦線が長らく政権を担当してきた。左翼戦線は2000年に自由化政策路線に転じた後も、2004年の連邦下院選挙、2006年の州議会選挙と勝利し、おおむね支持されていたが、州政府が進めようとしたタタ自動車の工場用地(シングル)とインドネシア系財閥の経済特区(ナンディグラム)のための土地収用問題が紛糾して、ママタ・バナジー率いるAITCが州政府批判の先鋒に立ち、支持を広げた。AITCは会議派と選挙協力し2009年の連邦下院選挙で躍進し、さらに2011年の州議会選挙で294議席のうち184議席を獲得し圧勝した。選挙前に176議席をもっていたCPI(M)は40議席を得るのみと大敗して、左翼戦線による州政府運営は終止符を打っていた。また、2012年に、外資規制緩和を進めようとするUPA政権の政策に反対するAITCは、会議派率いるUPA政権から離脱して、会議派との選挙協力も解消していた。

それゆえ今回の連邦下院選挙では、BJP、会議派、AITC、CPI(M)率いる左翼戦線の4陣営が争う構図となった。また今回はAITCの州政府運営の評価が問われ、他党がこれに挑戦するという形にもなっていた。これまで西ベンガル州ではプレゼンスの低かったBJP

もモディ要因で支持を拡大するのか、選挙結果が注目されていた。

表3.5 西ベンガル州の連邦下院選挙結果
連邦下院選挙結果（定数42）

	1999		2004		2009		2014	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
有権者数（人）	47,649,856		47,437,431		52,420,609		62,833,128	
投票率（%）	75.1		78.0		80.7		82.2	
会議派	3	13.3	6	14.6	6	13.5	4	9.6
全インド草の根会議派(AITC)	8	26.0	1	21.0	19	31.2	34	39.3
BJP	2	11.1	0	8.1	1	6.1	2	16.8
インド共産党（マルクス主義）(CPI(M))	21	35.6	26	38.6	9	33.1	2	22.7
インド共産党(CPI)	3	3.5	3	4.0	2	3.6	0	2.3
革命社会党(RSP)	3	4.3	3	4.5	2	3.6	0	2.4
前衛党	2	3.5	3	3.7	2	3.0	0	2.1

(出所) Election Commission of India ウェブサイトのデータ、井上（2006）および上田ほか（2011）を参照して作成。

結果は、AITC が 34 議席を獲得し、前回と比較して議席数で 15、得票率でおよそ 8%ポイント伸ばして 39.4%を得て大勝した。また、BJP は、議席数は 2 議席と 1 議席を積み増すにとどまったものの、投票率を前回の 6.1%から 16.8%に大幅に伸ばし、会議派を抜き第 3 位の票を得ており、躍進といえる。これに対し、CPI(M)は得票率こそ AITC に次ぐ 22.7%を得たものの、前回からおよそ 10.4%ポイント減らし、獲得議席も 9 議席から 2 議席に後退して大敗した。会議派の得票率は前回から 3.9%ポイント減り 9.6%となり、議席も 6 から 4 に後退した。得票傾向をみると、左翼戦線を支持してきた社会的弱者層や貧困層の票が AITC に向かい、また西ベンガル州では少なくない比率をもつムスリム票もモディ批判を展開したバナジー州首相の AITC が引きつけていた。得票率を伸ばした BJP は上位カーストに加え若年層とくに初めて投票権を得た層の支持を得た。バナジーはおそらく中央では過半数をとる政党はなく連立政権となり、そこで自党の躍進を梃子にして中央政府への影響力をもつ構想であったと推測される。AITC は西ベンガル州では大勝したものの、BJP が連邦下院で単独過半数を得てそのような目算は崩れた。また、西ベンガル州という観点から重要なことは、近年まで左翼戦線の牙城であった同州において、今回の選挙で AITC に加えて、BJP が勢力を増す結果となり、州与党の AITC に対する野党としての地位すら左翼戦線は危うい状況になったという州の政治状況の変貌ぶりである。AITC と BJP は、支持層が重複しており、経済の状況次第では BJP がこれまで浸透し得なかった西ベンガル州で今後さらに支持を拡大する可能性もある。

5. アッサム州：BJP の伸長

紅茶の生産で有名なアッサム州は、2011 年のセンサスでは人口は 3121 万人であり、都

市人口比率は 14.1%と低く、SCs 比率は 7.2%、STs 比率は 12.4%、識字率は 72.2%である(表 3.1)⁽⁵⁾。アッサム人ヒンドゥー教徒が過半数を占めるが、歴史的にプランテーションが重要な産業であったために州外からの移民や出稼ぎ労働者も多く、バングラデシュ、ネパールからの多くの外国人移民や不法滞在者を抱えていることもこの州の特徴である。同州の連邦下院議員定数は 14 であり、そのうち SCs の留保議席は 1、STs への留保議席は 2 である。2013 年度の一人当たり SDP は、2 万 4533 と東部諸州のなかでもっとも低く、またその 2004 年度からの年平均成長率も 4.3%と全インド平均を大幅に下回っている。

現在、アッサムの州政権は 2001 年よりタルン・ゴゴイ州首相率いる会議派が担当しており、歴史的にも会議派が与党であった時代が長い。ただし、外国人追放運動が 1980 年代に盛んとなり、この運動からアッサム人民評議会(AGP)が結党され州政権を 1985 年から 1991 年まで、1996 年から 2001 年まで担うなど、1990 年代は会議派と AGP が主要な政党であった。また、BJP は、1990 年代後半から AGP 以上に移民に対する強硬な姿勢を喧伝して支持を次第に広げていた。それでも、州政権を担う会議派は 2004 年連邦下院選挙時には全 14 議席のうち 9 議席、2009 年時には 7 議席を獲得した。ただし、バドゥルディン・アジマルが率いる全インド統一民主戦線(以前の名称はアッサム統一民主戦線)は会議派の票、とくにムスリム票を奪って伸びてきていた。同党は、移民の権利保護に厚いとされる不法移民(審判所決定)法(1983)⁽⁶⁾を最高裁が 2005 年に破棄したときに、会議派がこの破棄が起こることを阻止する努力をしなかったとして会議派と袂を分かって創設された党であり、中央の UPA の友党であったが、会議派が与党である州政府では主要な野党であり、2009 年連邦下院選挙時に 1 議席を獲得した。また 2009 年選挙時には、BJP と AGP は選挙協力して、AGP は議席を 2 から 1 に減らしたものの、BJP は 2 から 4 議席に伸ばしていた。

今回の選挙では、ゴゴイ州首相率いる会議派州政権は楽観的であり、モディ・マジックはアッサムでは効かないと述べていた。その背景には、2011 年の州議会選挙で、会議派は全 126 議席のうち、2006 年の 53 議席から 25 議席積み増して、78 議席を獲得していたことがある。BJP はグジャラート・モデルや反腐敗といった主張がアッサム州ではあまり票を掘り出さないとみなし、若者の職がムスリム・バングラデシュ人に奪われていると訴え、1971 年以降の不法移民(ただしヒンドゥー・バングラデシュ人は別)を一掃するとモディが演説するなど、ヒンドゥー主義と反不法移民を前面に押し出した選挙戦となった。なお、今回は BJP と AGP は選挙協力に失敗した。そのほかボド族の自治運動も重要である。

選挙結果は、BJP が得票率をおよそ 20%ポイント伸ばし、協力党なしに全 14 議席のうち 7 議席を獲得した。投票率が 79.9%と高かったことも今回の選挙の特徴である。会議派

は得票率を5%ポイント減らし、議席も7議席から3議席に後退した。その友党であるボド人民戦線も議席を失った。そのほか、AGPは得票率を3.8%にまで10%ポイント以上減らし1議席も獲得できず、反・反移民を掲げる全インド統一民主戦線は得票率を若干減らしながらも議席を3に伸ばした。州政権を担う会議派としては惨敗と考えられる。BJPが優勢となった要因としては、反移民を掲げてきたAGPの指導者層がBJPに移り、また選挙期間中、モディが複数回アッサムを訪問して反移民を訴えるなど、AGPの支持層や会議派を支持してきたヒンドゥーのプランテーション労働者の支持層を取り込んだこと、ムスリムの票が会議派と全インド統一民主戦線に割れたことなどが挙げられる。ただし、今回の選挙がアッサムにおける宗派間対立の根を深くしてしまった可能性を視野に入れておく必要があるだろう。

表3.6 アッサムの連邦下院選挙結果
連邦下院選挙結果（定数14）

	1999		2004		2009		2014	
	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
有権者数（人）	14,290,673		15,014,874		17,470,329		18,885,274	
投票率（%）	71.2		69.1		69.5		79.9	
会議派	10	38.4	9	35.1	7	34.5	3	29.9
BJP	2	29.8	2	22.9	4	16.2	7	36.5
アッサム人民評議会(AGP)	0	11.9	2	19.9	1	14.6	0	3.8
全インド統一民主戦線（旧アッサム統一民主戦線）					1	16.1	3	14.6
ボドラント人民戦線					1	5.4	0	2.2
その他	2		1		0		1	

（出所）Election Commission of Indiaウェブサイトのデータ、木村ほか（2006）および上田ほか（2011）を参照して作成。

6. 北東諸州

連邦下院の議席は、アッサム以外の北東諸州では、メガラヤ、アルナーチャル・プラデーシュ、トリプラ、マニプルはそれぞれ2議席、ナガランド、ミゾラム、シッキムはそれぞれ1議席で合計11議席ある⁽⁷⁾。この11議席のうち2009年選挙では会議派が6議席、CPI(M)が2議席、ナショナリスト会議派党(NCP)が1議席、ナガランド人民戦線が1議席、

表3.7 北東諸州(アッサムを除く)の基礎情報

	人口(人)	一人当たりSDP(2012年度)(ルピー)	一人当たりSDP年平均成長率(2004~2012年度)(%)	都市人口比率(%)	指定カースト(SCs)比率(%)	指定部族(STs)比率(%)	識字率(%)		
							男性(%)	女性(%)	
シッキム	610,577	75,137	13.8	25.2	4.6	33.8	81.4	86.6	75.6
アルナーチャル・プラデーシュ	1,383,727	37,051	4.2	22.9	-	68.8	65.4	72.6	57.7
ナガランド	1,978,502	46,889	5.5	28.9	-	86.5	79.6	82.8	76.1
マニプル	2,570,390	23,996	3.2	32.5	3.8	35.1	79.2	86.1	72.4
ミゾラム	1,097,206	40,930	6.5	52.1	0.1	94.4	91.3	93.3	89.3
トリプラ	3,673,917	42,315	7.1	26.2	17.8	31.8	87.2	91.5	82.7
メガラヤ	2,966,889	38,627	6.1	20.1	0.6	86.1	74.4	76.0	72.9
全インド・全インド平均	1,210,569,573	38,856	6.1	31.2	16.6	8.6	73.0	80.9	64.6

（出所）表3.1と同じ。

（注）表3.1と同じ。

シッキム民主戦線が 1 議席という結果であり、BJP 自体は 1 議席ももっていなかった。

今回の選挙では、BJP は上述したようにアッサムで躍進しており、隣接するアルナーチャル・プラデーシュでも 1 議席を獲得した。そのほか BJP の友党であるナガランド人民戦線、国家人民党 (NPP) がそれぞれ 1 議席を得て、残り 8 議席は会議派 5 議席、CPI(M)2 議席、シッキム民主戦線 1 議席という結果となった。

表3.8 北東諸州(アッサムを除く)の連邦下院選挙結果

		2009		2014				2009		2014	
アルナーチャル・プラデーシュ (定数2)						シッキム (定数1)					
有権者数 (人)		734,541		759,387		有権者数 (人)		300,584		370,611	
投票率 (%)		65.3		78.6		投票率 (%)		83.8		83.4	
		議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)			議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
	BJP	0	37.2	1	46.1		シッキム民主戦線	1	63.3	1	53.0
	会議派	2	51.1	1	41.2		シッキム革命戦線	-	-	0	39.5
ナガランド (定数1)						メガラヤ (定数2)					
有権者数 (人)		1,321,878		1,182,948		有権者数 (人)		1,277,739		1,567,241	
投票率 (%)		90.0		87.8		投票率 (%)		64.4		68.8	
		議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)			議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
	ナガランド人民戦線	1	70.0	1	68.7		会議派	1	44.8	1	37.9
	会議派	0	29.4	0	30.1		国家人民党(NPP)	-	-	1	22.2
マニプル (定数2)						ナショナルスト会議派党(NCP)					
有権者数 (人)		1,735,982		1,774,325		有権者数 (人)		2,082,206		2,388,819	
投票率 (%)		77.2		79.6		投票率 (%)		84.5		84.7	
		議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)			議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
	会議派	2	43.0	2	41.7		インド共産党 (マルクス主義) (CPI(M))	2	61.7	2	64.0
	ナガランド人民戦線	-	-	0	19.9		会議派	0	30.8	0	15.2
	インド共産党(CPI)	0	14.9	0	14.0		全インド草の根会議派(AITC)	0	0.6	0	9.6
	BJP	0	9.5	0	11.9		BJP	0	3.4	0	5.7
ミゾラム定数1						トリプラ (定数2)					
有権者数 (人)		629,374		702,170		有権者数 (人)		2,082,206		2,388,819	
投票率 (%)		51.8		61.7		投票率 (%)		84.5		84.7	
		議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)			議席数	得票率(%)	議席数	得票率(%)
	会議派	1	65.6	1	48.6		インド共産党 (マルクス主義) (CPI(M))	2	61.7	2	64.0
	無所属	0	32.2	0	47.2		会議派	0	30.8	0	15.2

(出所) Election Commission of Indiaウェブサイトのデータより作成。

アルナーチャル・プラデーシュ：会議派 1 議席を維持したものの BJP が 1 議席を奪取

中国との国境紛争地区を抱えるアルナーチャル・プラデーシュ州の人口は、2011 年のセンサスでは 138 万人であり、STs は 68.8%，2012 年度の一人当たり SDP は 3 万 7051 ルピーであった(表 3.7)。2 議席が争われたアルナーチャル・プラデーシュでは、州議会 60 議席も同時に選挙となった。事故死したドルジェ・カンドゥの後を受けて 2011 年に州首相となっていたナバム・ツキを首班とする会議派の州政権が州議会選挙を前倒しにして同時に実施したためである。連邦下院選挙については会議派が 2 議席を独占していたが、今回 BJP がそのうちアルナーチャル西選挙区の 1 議席を、16.9 万票を得て奪取した。次点の会議派候補者は 12.8 万票であった。会議派候補が 11.8 万票を得て勝利したアルナーチャル東選挙区においても次点の BJP 候補とは 1.2 万票あまりと僅差であり、BJP は同州で躍進したといえる。実際、得票率でみると、BJP が 8.9%ポイント伸ばしたのに対し、会議派は 9.9%ポイント減らし、BJP の得票率 46.1%は会議派の 41.2%を上回っている(表 3.8)。

アルナーチャル・プラデーシュではモディ・ウェーヴが到達していたと考えられる。州議会選挙については議席 60 のうち、与党会議派は前回 2009 年の州議会選挙と同じく 42 議席を獲得して安定多数を得たが、BJP も 3 議席から 11 議席に躍進した。それでも会議派州政権の同時選挙戦術は、州議会選挙については準備不足であった BJP のこれ以上の伸長を阻止したともいえる。

ナガランド：BJP に近いナガランド人民戦線が 1 議席を維持

ナガランドは 2011 年には人口 198 万人、STs 比率は 86.5% である(表 3.7)。一人当たり SDP は 2012 年度には 4 万 6889 ルピーであった。ナガ系民族の人々はインドからの独立運動を展開し、1990 年代までは選挙のボイコットもたびたび行われてきた歴史がある。2003 年に、会議派から分かれて結成されたナガランド人民戦線が主導するナガランド民主連合が会議派から政権を奪取して以来、中央の会議派率いる UPA 政権が 2009 年連邦下院選挙時には大統領統治を敷いたものの、同州の連邦下院の 1 議席はナガランド人民戦線が獲得してきた。また、2009 年の州議会選挙ではナガランド人民戦線が 60 議席のうち 38 議席を獲得しており、今回は、州首相を務めているニフィウ・リオ自身が首相職を辞してナガランド人民戦線の連邦下院議員候補となった。ナガランド人民戦線は BJP が主導する NDA に参加しており、BJP とは近い関係にある。今回もナガランド人民戦線がおよそ 7 割の票を得て会議派候補を破り、議席を獲得した(表 3.8)。

メガラヤ：会議派が 1 議席、国家人民党(NPP)が 1 議席

2011 年センサスによると、メガラヤの人口は 297 万人、そのうち STs は 86.1% である(表 3.7)。歴史的に会議派の地盤であるが、州会議派内の権力闘争があり、不安定な状況が続いている。D.D.ラパンが 2010 年に辞任したのち、ムクル・サングマが州首相に就任し、2013 年の州議会選挙では 60 議席のうち会議派が 29 議席を獲得して第 1 党を維持している。会議派の連邦下院議員を長らく務め州首相の経験もあったプルノ・サングマは 2008 年に会議派から独立した NCP の州議員になり、その娘のアガタ・サングマが NCP から連邦下院議員となっていたが、今回プルノは国政選挙に復帰すべく、2013 年に新しく結党した NPP から出馬した。プルノは BJP 率いる NPA と同盟を組むと明言している。選挙結果は、シロン選挙区では無所属の候補者や BJP の候補者の挑戦を受けた会議派現職が 20.9 万票を得て次点(無所属候補)に 4 万票あまり差をつけて 1 議席を維持し、トゥラ選挙区で

はプルノが 23.9 万票を獲得し 20.0 万票を得た会議派候補を退け NPP に 1 議席をもたらした(表 3.8)。メガラヤにおいても、政党というよりも、サングマー族など個々の政治家の動向が依然として重要である。

シッキム：シッキム民主戦線が 1 議席を維持

人口 61 万人のシッキムは観光業や中国チベット地方との国境貿易が好調で、一人当たり SDP は 7 万 5137 ルピーと全インド平均の 2 倍あまり、その 2004 年度から 2012 年度までの成長率は 13.8%であった(表 3.7)。STs 比率はインド平均よりも高いものの、北東諸州のなかでは少ない。2001 年のセンサスでは、ネパール系がおよそ 75%を占め、宗教ではヒンドゥーが 61%、仏教徒が 28%などとなっている。1979 年から 1994 年まで州首相の座にあったシッキム闘争会議の N.B.バンダーリー、1994 年から州首相を務めるシッキム民主戦線のパワン・チャムリンが長らく有力な政治家であったが、今回はシッキム民主戦線に対する挑戦が新たに結党されたシッキム革命戦線により行われるという構図であった。同党を結成した中心人物は、チャムリンのナンバー2 であり、2013 年にシッキム民主戦線を脱退した P.S.ゴレイである。また、今回の連邦下院選挙は州議会選挙と同時選挙であった。2004 年州議会選挙では全 32 議席のうち 31、2009 年の選挙では 32 議席すべて、シッキム民主戦線が獲得してきた。シッキム革命戦線は 20 年に及ぶチャムリンのいわば独裁を非難し、変化をスローガンにした。州議会選挙ではシッキム民主戦線が 32 議席のうち 22 議席を獲得して 5 期連続で勝利し、また連邦下院議員議席も 16.4 万票を得てシッキム民主戦線が維持した(表 3.8)。シッキム革命戦線は都市部で票を伸ばし、連邦下院選挙でも議席は得られなかったものの 12.2 万票と善戦しており、また州議会では 10 議席を獲得した。他方で、会議派、BJP いずれの候補者も連邦下院選挙では得票数は 1 万票にみたなかった。経済的な成功があり、シッキム民主戦線への支持は今のところ揺るがず、チャムリンは州首相に再任しその任期は 1994 年から 20 年あまりとなり、西ベンガル州首相を 23 年務めたジョティ・バサー(CPI(M))の記録に迫ることになる。

マニプル：会議派が 2 議席を維持

マニプルの人口は 257 万人、STs 比率は 35.1%である(2011 年、表 3.7)。一人当たり SDP は 2012 年度には 2 万 3996 ルピー、その 2004 年度からの年平均成長率は 3.2%と経済状況はインド平均を大きく下回り、北東諸州のなかでもいずれも最も低い。2012 年の州議会

選挙では全 60 議席のうち、2002 年から州首相を務めるオクラム・イボビ・シン率いる会議派が 42 議席を獲得している。インパール周辺の平野部と山岳部のふたつの選挙区があり、後者は STs 選挙区である。ナガ系民族のナガランド州との統合要求も依然として争点のひとつである。会議派が 2 議席ともに現職をたて、得票率 41.7%を得て 2 議席ともに獲得した(表 3.8)。ただし、インナー・マニプル選挙区では会議派が次点のインド共産党に 10 万票近くの差をつけたが、アウター・マニプル選挙区では次点のナガランド人民戦線の候補者との差は 1.5 万票と僅差であった。BJP も 2 議席ともに争ったが伸びず、マニプルではモディ・ウェーヴは広がらなかった。

ミゾラム：現職会議派が 1 議席を維持

ミゾラムは人口 110 万人、STs は 94.4%である(表 3.7)。一人当たり SDP は 2012 年度には 4 万 930 ルピー、その 2004 年度からの年平均成長率は 6.1%とおおむね全インドの平均と同じである。キリスト教徒が多いという特徴もある。独立をめざしたミゾ民族戦線が 1986 年に連邦政府と和平協定の合意に達し 1987 年に州となったという経緯をもち、それ以来会議派とミゾ民族戦線の 2 党が同州の有力政党である。2008 年に州首相に就任したラル・タンハウラの率いる会議派が 2013 年の州議会選挙でも全 40 議席のうち 34 議席を得て圧勝している状況であった。なお、その他 6 議席はミゾ民族戦線とその同盟党である。今回の選挙では、現職会議派のベテラン政治家 C.L. ルアラ、ミゾ民族戦線などが擁立した候補者 R.R.ロイテ(無所属として出馬)、そして庶民党の候補者が 1 議席を争った。会議派は焼畑農業をやめさせ、雇用を創出することを謳う新土地使用政策を掲げて戦い 48.6%、21.0 万票を得て勝利したが次点(ロイテ)との差は 1 万票未満であった(表 3.8)。

トリプラ：インド共産党(マルクス主義)が 2 議席を維持

バングラデシュと長い国境を接しているトリプラは、2011 年センサスでは人口 367 万人であり、面積は比較的小さいものの人口はアッサムを除くと北東諸州のなかで最も多く、STs の比率は 31.8%と北東州のなかでは少ない(表 3.7)。2001 年のセンサスでは 85.6%がヒンドゥー教徒であり、次いでムスリムが 8.0%、キリスト教徒、仏教徒がいずれもおおよそ 3%であった。2012 年度の一人当たり SDP は 4 万 2315 ルピーであり、その 2004 年度からの年平均成長率は 7.1%である。同州ではベンガル人の流入と定住が STs の暮らす土地を侵食したため、ベンガル人難民の排斥運動がある。また、ベンガル人人口が多いこと

もあり、平和と開発をめざす CPI(M)率いる左翼戦線が強く、2013年の州議会選挙でも全60議席のうち50議席を得た(残り10議席は会議派)。州首相は CPI(M)のマニク・サルカルであり、1998年より州首相を連続して4期務めている。今回の連邦議会選挙でも CPI(M)がいずれの選挙区でも次点の会議派候補に50万票あまりの大差をつけて2議席を独占した(表3.8)。BJPもほとんど票を伸ばせなかった。

[注]

-
- (1) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)および各種新聞報道のほか、オディシヤ州の選挙分析を行ったものとしておもに吉田(2001)、吉田(2006a)、上田ほか(2011)、Das(2014a; 2014b)、Mohanty and Ray(2014)を参照している。
 - (2) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)および各種新聞報道のほか、ジャールカンド州の選挙分析を行ったものとしておもに吉田(2006b)、上田ほか(2011)、Dayal(2014)、Mahaprashasta(2014)を参照している。
 - (3) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)と各種新聞報道のほか、チャッティースガル州の選挙分析を行ったものとしておもに上田(2006)、上田ほか(2011)、Saxena(2014)、Tripathi(2014)を参照している。
 - (4) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)および各種新聞報道のほか、西ベンガル州の選挙分析を行ったものとしておもに森(2001a)、井上(2006)、上田ほか(2011)、Chatterjee and Basu(2014)、Chattopadhyay(2014)を参照している。
 - (5) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)と各種新聞報道のほか、アッサム州の選挙分析を行ったものとしておもに森(2001b)、木村・峯島・詹(2006)、上田ほか[2011]、Sharma(2014)、Talukdar(2014b)を参照している。
 - (6) Illegal Migrants (Determination by Tribunals) Act (1983)。不法移民の認定と送還についてアッサム州のみに適用されていた法律である。一般には The Foreigners Act 1946 が適用される。なお、同法が憲法違反であると最高裁に訴えた人物は全アッサム学生組合委員長からアッサム人民会議に入った S.ツノワルであり、2011年に BJP に移って、今回の連邦下院選挙でも当選し、青年問題およびスポーツ大臣に任命されている。
 - (7) 本節では Election Commission of India のウェブサイト掲載データ、アジア経済研究所(各年版)および各種新聞報道のほか、北東諸州の選挙分析を行ったものとしておもに森(2001b)、井上(2001)、木村・峯島・詹(2006)、峯島(2006)、上田ほか(2011)、Talukdar(2014a)を参照している。

[参考文献]

<日本語文献>

アジア経済研究所 各年版. 『アジア動向年報』アジア経済研究所.

井上恭子 2001. 「シッキム州」 広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 241-243.

— 2006. 「西ベンガル州：またも左翼戦線が圧勝」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 249-256.

上田知亮 2006. 「チャッティースガル州：会議派不信とサンガ・パリワールの浸透」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 245-247.

上田知亮ほか 2011. 「東部・北東部諸州の選挙分析」 広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編『インド民主主義の発展と現実』勁草書房 177-217.

木村真希子・峯島秀暢・詹彩鳳 2006. 「北東諸州」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 257-274.

峯島秀暢 2006. 「シッキム州：シッキム民主戦線の優位確定」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 275-276.

森日出樹 2001a. 「西ベンガル州」 広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 211-225.

— 2001b. 「北東諸州」 広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 227-239.

吉田修 2001. 「オリッサ州：政治エリートの椅子取りゲームと経済後進州のグローバル化」 広瀬崇子編『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房 257-268.

— 2006a. 「オリッサ州：野党連合の『不戦敗』と中央の政治的動きを読み違えた選挙民」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 231-238.

— 2006b. 「ジャールカンド州：新州分離の意味を問われたインド人民党」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店 239-244.

広瀬崇子編 2001. 『10億人の民主主義：インド全州，全政党の役割と第13回連邦下院選挙』御茶の水書房.

広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編 2006. 『インド民主主義の変容』明石書店.

広瀬崇子・北川将之・三輪博樹編 2011. 『インド民主主義の発展と現実』勁草書房.

<外国語文献>

Chatterjee, J. and S. Basu. 2014. “West Bengal: Mamata Holds on to Her Fortress.” *The Hindu*, June 30.

(<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/west-bengal-mamata-holds-on-to-her-fortress/article6166220.ece>).

- Chattopadhyay, S. S. 2014. "West Bengal: Saffron Portents." *Frontline*, May 16.
- Das P. 2014a. "Late Swing?" *Frontline*, May 16: 76-77.
- 2014b. "Conjurer of Odisha." *Frontline*, June 13: 61-63.
- Dayal, H. 2014. "Jharkhand: Confirming the National Trend." *The Hindu*, May 23.
(<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/jharkhand-confirming-the-national-trend/article6037678.ece>).
- Mahaprashasta, A. A. 2014. "Jharkhand: Skirting Real Issues." *Frontline*, May 16: 39-40.
- Mohanty, P. and P. Ray. 2014. "Odisha: Rise of One-Party Dominant State." *The Hindu*, June 25.
(<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/odisha-rise-of-oneparty-dominant-state/article6151761.ece>).
- Saxena, A. 2014. "In Chhattisgarh, BJP Builds on Success of 2009." *The Hindu*, May 25.
(<http://www.thehindu.com/news/national/in-chhattisgarh-bjp-builds-on-success-of-2009/article6045243.ece>).
- Sharma, D. P. 2014. "Assam: BJP's Entry in North East." *The Hindu*, June 25.
(<http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/assam-bjps-entry-in-north-east/article6151572.ece>).
- Talukdar, S. 2014a. "General Election/North-East: Head Start for the Congress." *Frontline*, April 18: 47-50.
- 2014b. "Assam: Targeting 'Outsiders'." *Frontline*, May 16: 81-82.
- Tripathi, P. S. 2014. "Chhattisgarh: BJP Upbeat." *Frontline*, April 18: 27-28.

<ウェブサイト>

Election Commission of India (<http://eci.nic.in/eci/eci.html>).